

福岡県小学校 校長会報

協働・創造

福岡県教育庁教育振興部
義務教育課長

古島 裕太

福岡県小学校長会の皆様におかれましては、平素より本県の教育行政にご理解、ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

コロナ禍を経て、学習機会と学力を保障するという役割のみならず、子供たちにとっての全人的な発達・成長を保障する役割や、人と安全・安心につながるができる居場所・セーフティネットとしての福祉的な役割も学校が大いに担っていることが改めて認識されたところです。他方、不登校児童生徒の数は近年、増加傾向にあり、その要因としては、教育機会確保法の主旨の浸透や、コロナ禍において、生活リズムが乱れたこと、交友関係を築く資質・能力の不足などから、登校意欲がわきにくい状況にあったことなどが指摘されているところです。

このように学校を取り巻く環境が変化する中にあっても、子供たち一人一人の状況やニーズに応じた学びの実現に向けて日々最善を尽くしていただいておりますことに深く感謝を申し上げます。

さて、全国学力・学習状況調査の本県結果については、令和六年度も小学校の国語、算数ともに全国平均値を上回り、国語で七回、算数で六回連続、全国平均値以上を維持しています。児童質問調査では、「将来の夢や目標を持っているか」、「人の役に立つ人間になりたいと思うか」という質問について、全国平均値よりも肯定的な回答の割合が高いという結果でした。

このような結果が得られたのは、各校における学力向上プランに基づいた組織的な取組、検証改善サイクルの確立、さらには不断の授業改善など、これまでの様々な取組の成果が表れているものと考えています。皆様のご尽力に対し、改めて敬意を表し、重ねて感謝を申し上げます。

小学校段階は、幼児教育から接続し、様々な体験を通して、学びに向かう力を育み、生涯にわたって、学び続けていくための基礎を培う重要な時期です。また、発達支持的な生徒指導を基礎に、社会を形成していく上で不可欠な人間関係づくりを学んでいく貴重な場です。一人一台端末を活用した、友達との協働的な取組も通して、自らの考えを基に創造するなど、教室等でワクワクする時間を過ごせるよう、子供達を支援していくことの重要性がさらに増していると考えております。

このような「協働・創造」の取組は、各教室だけではなく、学校で、そして教育委員会でも必要なことだと考えます。学校においては、校長先生方にリーダーシップを発揮していただきながら、各教職員のみならず、学校外の様々な協力を得ての学校運営を引き続きお願いいたします。県教育委員会としても校長先生方をはじめ多くの関係者と協働をして、子供たちが安心して学び、生活することができるよう学校環境を整備してまいります。

共に頑張りましょう。



発行人

福岡県小学校長会
会長 廣 渡 一 郎

事務局

〒812-0053 福岡市東区箱崎2丁目52番1号
福岡リーセントホテル1階
TEL (092) 292-2292 FAX (092) 292-2294

特色ある学校経営

すべての子が「わかる」「できる」 交流及び共同学習の充実をめざして

古賀市立花見小学校長 河野 美希江

本校は、古賀市の北部に位置する児童数五百六十三人の中規模校です。令和五年度より、福岡県重点課題研究指定・委嘱事業として、課題四「通常学級における交流及び共同学習の充実」について、研究に取り組んでいます。二年次となる本年度は、研究主題「すべての子が『わかる』『できる』交流及び共同学習」の充実に向けて、支援体制の整備や、ユニバーサルデザインと合理的配慮を組み合わせた授業づくりの構築を目指しています。

一 本校の課題

本校において、特別支援学級の児童は、朝の会や帰りの会、あるいは学年や学校行事を交流学級の児童と一緒に活動する「交流」の側面は充実していますが、教科等のねらいの達成を目的とする「共同学習」の側面において課題がありました。例えば、共同学習の際、特別支援学級児童の特性を意識した支援が、「本当に必要なものか」ということや、「通常の学級のすべての児童が満足する学びとなり得ていたか」ということです。その解決のために、以下の三つの視点から研究に取り組んでいます。

二 研究の内容

(一) 視点一…支援体制の整備

特別支援学級担任と通常の学級担任が、特別

支援学級児童の合理的配慮や個別の目標など、適切な指導・支援の仕方について、適宜情報共有できるように、月一回、個別の指導計画や年間指導計画等を活用した「支援連絡会」を設定し、システム化及び日常化を図っています。

(二) 視点二…教育課程の編成の工夫

個別の年間指導計画について、全教科の内容がわかるように作成し、交流及び共同学習として最適な教科・単元を選定しています。さらに、個別の指導計画に、交流及び共同学習で必要な指導・支援内容と方法を明記することで、支援連絡会において通常の学級担任と特別支援学級担任の双方で評価ができるようにしています。



【友だちと話し合いながら取り組む共同学習の様子】

(三) 視点三…授業づくりと評価

全ての児童が理解しやすいようユニバーサルデザインと、それだけでは理解が難しい特別支援学級の児童に対して合理的配慮をもとにした、個別の支援を位置付けた授業を構築します。そして、主体的に取り組む態度や思考力等、ペーパーテストでは評価しにくい観点についてルーブリック（評価基準表）を作成しています。このように、ユニバーサルデザインと合理的配慮に基づく個別の支援を組み合わせた、指導と評価の一体化を図ったりすることで、すべての子が、「わかる」「できる」を実感することができると考えます。

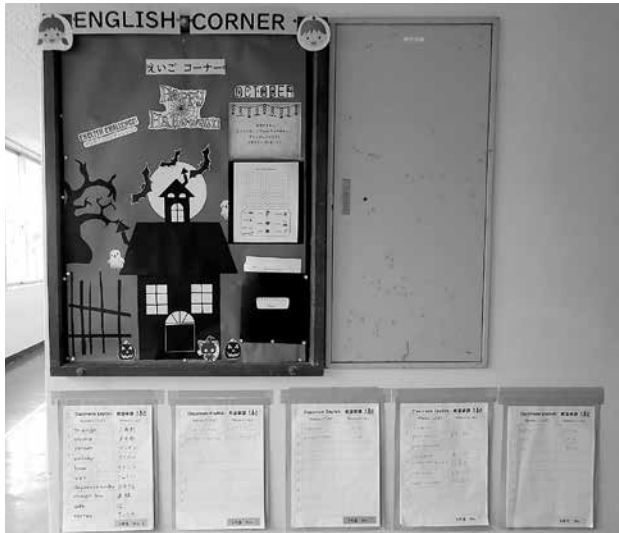
三 終わりに

本年度、支援連絡会が日常的に行われるようになったことで、特別支援学級の児童の合理的配慮について、通常の学級担任も理解を深め、授業改善に生かすことができるようになりました。一方で、さらに支援の内容や方法について検討する必要があります。また、特別支援学級の児童の「できること」や「得意なこと」に目を向けた授業づくりも大切です。次年度の最終報告会に向けて、さらに研究を深めていきたいと考えています。

CLIL的アプローチを 大切にした学校経営

久留米市立江上小学校長 石塚 美和子

本校は、明治八年に開校し、来年度創立百五十周年を迎える児童数九十七名の小規模校



【日々の積み上げがわかる英語コーナーの様子】

です。久留米市南部に位置し、田園地帯に囲まれています。本校では、子どもたちが学習した英語を日常生活の中で自然に使えるように、学校全体で英語に親しみ、英語を使おうとする子どもの育成に努めています。

一 単元を見通した学習活動づくり

CLILとは、教科の学習内容と英語の統合型学習です。外国語や外国語活動以外の教科で、単元を通して繰り返し出てくる言葉や文を英語に置き換えて使います。例えば、一年生算数「かたち」の学習では、色と形をキーワードに繰り返し使いました。子どもたちは「Blue triangle」、「Red circle」など、英語を使って交流することができました。中・高学年になると、学習で友達を励ます「You can do it」や、できた

ことを認める「Good job」などを繰り返し使うことで、生活場面でも英語で伝える子どもたちの姿が見られるようになりました。

このように、英語の学習がある日だけでなく、毎日の教科の学習で、言いやすい言葉、繰り返し出てくる言葉や文は何かを見極め、教科の学習で英語を使えるようにしていくことは、英語に慣れ親しませることにつながると考えます。

二 A L Tと連携した授業づくり

A L T来校時には、学習内容の中心となるキーワードをA L Tと共有して授業を進めます。学んだ英語は、クラスルームイングリッシュに付加して英語コーナーに掲示し、各学年の学びの積み上げの可視化を図っています。

三 英語に親しむ環境づくり

学校生活の中で、パターン化した英語を繰り返し使う場面を位置づけています。例えば、学級での朝と帰りの挨拶、授業開始と終わりの挨拶、健康観察などです。給食時間は、当番が給食室に行く時や食器の返却時に、給食の先生に学年やお礼の言葉を英語で伝え、給食の先生も英語で応答しています。職員室に入室する時は学年、名前を英語で伝え、入室許可を取ります。校内放送は、一部を英語で行っています。また、月に一回、A L Tによる英語絵本の読み聞かせを給食時間にテレビ放送で位置づけています。

その他に、英語コーナーでは、季節の掲示物やクイズを掲示し、子どもたちが楽しみながら取り組むことができるように工夫しています。このように、子どもたちは生活の中で、経験

を通して英語に慣れ親しんでいます。これからも、英語に親しみ、英語を使おうとする子どもを目指して推進していきます。

宮原中学校区における 小中一貫教育の充実を目指して

大牟田市立天の原小学校長 福山 恵里佳

本校は、熊本県荒尾市に隣接する大牟田市南東部の高台に位置しています。全校児童は現在二百二名。宮原中学校区にあり、駿馬小、玉川小と共に、一中、三小で小中一貫教育（二年度）を実施しています。「学力向上」「不登校対応」が大きな課題です。改善に向けて、小学校と中学校の密接な連携が必要なことから、次のようなねらいを設定しています。

- ①義務教育九年間を見通した教科内容の系統性・連続性のある指導をすることにより、児童生徒の学力向上や心身の健全な育成、不登校や「中一ギャップ」の解消を目指す。
- ②校区の小・中学校がより密接な関係を築くことで、教育内容・活動の充実を図り、教職員の指導力の向上を目指す。
- ③学校・家庭・地域の「つながり」を深めることで、学校は「地域とともにある学校づくり」を、地域は「学校を核とした地域づくり」を目指す。

そこで、M・H・A・T（M…宮原中・H…駿馬小・A…天の原小・T…玉川小）では、「志を持ち 自ら考え 行動できる児童生徒の育成」を共通の学校教育目標とし、小中一貫教育の重点目標「子ども・家庭・地域が共に学び、共に育つM・H・A・T」を具現化していくために、次

- のような「つなぐ」をキーワードとした取組を行っています。
- 学びをつなぐ
- ・ 九年間を見通した系統性、連続性のある教育課程の作成
 - ・ 学習内容、指導方法の共通理解
 - ・ 家庭学習の習慣化
 - ・ 学習や生活の手引き等の作成 等
- 子どもたちをつなぐ
- ・ 交流行事の実施（ようこそ！先輩、体育会参加、合同野外活動、小中学校・地域・家庭合同クリーンアップ活動 等）
 - ・ 児童会生徒会のリーダーミーティング 等



【小中交流「ようこそ先輩！」の様子】

○教職員をつなぐ

- ・ 目指す子ども像の共有
 - ・ 児童生徒理解に向けた情報共有
 - ・ 相互乗り入れ授業の実施
 - ・ 相互の授業参観や合同研修会の実施 等
- 学校と家庭、地域をつなぐ

- ・ 学校運営協議会（CS）の設置
 - ・ 専任の地域学校協働活動推進員の配置
 - ・ 専任のSSWによる児童生徒、家庭の支援
 - ・ PTAの連携、地域行事への参加
 - ・ 地域ボランティアの活用（環境整備、放課後子ども塾 等）
 - ・ 小中一貫教育の情報発信（学校便り等）等
- 以上のような取組を通して、少しずつ郷土愛が育まれ、登校意欲や学習意欲が向上してきていることを感じます。今後も、学校・家庭・地域の三者で、目標やビジョンを共有しながら、義務教育九年間を見通した児童生徒の育成に努めてまいります。

学校の強みを生かした学校経営

大任町立今任小学校長 種 具 朋 一 郎

本校の児童は素直で明るく、どの学年も落ち着いて生活をしています。教職員は協働性があり、コミュニケーションを大切にしながら日々の教育活動を行っています。

◆ICT活用「全員が提案授業を！」

大任町は、児童全員にタブレット端末が用意され、電子黒板やWi-Fi環境も整っていることから、ICTを活用した授業改善に取り組んでいます。授業研において、「提案授業とし

て授業改善のアイデアを発信してもらいたい」と提案したところ、全教員が自分の得意教科において、様々なICTの使い方を工夫した独自の提案を行いました。子どもたちは、文房具のようにタブレット端末を使いこなして学習を進めています。

◆新しい学校づくり「主体的なアイデア発信」

本校は令和八年度、町内全三校（二小一中）を統合した義務教育学校となります。全教員には「いずれ一緒にいる町の子どもたちのために二小が連携し、先生方のアイデアで新たな教育課程をつくっていかう」という話をしました。



【ICTを使った2小合同での遠隔授業】

二小合同の会議の場では「二年生は、お楽しみ交流会をしよう」「六年生は、町の史跡を使った合同学習はできないか」等、様々なアイデアが出されました。「町の子どものために」の意識の元、全教員の主体的な参画による新しい学校づくりが進んでいます。

◆生徒指導「全ての児童に学びの保障を！」

本校は長年、不登校児童への対応が課題でした。校内委員会において「学校の対応策がその子の人生を変えるという意識で対応策を検討してほしい。」と、思いを伝えました。委員会に参加する全員が「どうすればこの子が変わるのか」ということを徹底して話し合い、出されたアイデア（登下校支援や個別学習対応、居場所づくり等）を「学校としてできる取組」として家庭へ提案し続けました。その結果、長期欠席をしていた子が集団登校で登校してくるようになったのです。全教員の「この子をどうにかしたい」という思いと、組織的な対応により、全ての児童に学びの保障ができていくことをうれしく思っています。

◆学力向上「誰一人取り残さない！」

「本校の子どもたちを誰一人取り残したくない。全学級が温度差なく取り組める、学力向上策を考えよう。」と、校内委員会で提案し、メンバー全員で「今任小個別対応学習」に取り組むことを決定しました。学級全体と個の伸びを確認しながら、取組の成果を実感することができています。

閉校まで残りわずかですが、本校に通う全ての子どもたちのために、魅力ある学校をつくっていききたいと思っています。

鍛ほめ福岡メソッドの取組

直方市立植木小学校長 藤瀬 正 朋

本校は、令和四年度から、福岡県教育委員会から「学ぶことに挑み続ける子どもを育む鍛ほめプロジェクト」に係る調査研究指定を受け、この「鍛ほめ福岡メソッド」を活用した学校教育目標の具現化を目指し、研究を積み重ねていくところです。

一 鍛ほめ福岡メソッドのコンセプト

「目標設定の活動」「挑む活動」「振り返る活動」の3つの活動が循環するように設定し、このプロセスにおいて、指導者が大切にすべき指導の前提に「鍛ほめ実践三か条」があります。

- (一) 目標設定の活動…チャレンジの気持ちを高める
- (二) 挑む活動…チャレンジし、プロセスを記録する
- (三) 振り返る活動…チャレンジのプロセスを振り返る

二 児童会のスローガン作成とその運用

四月に、委員会の各委員長を校長室に集め、植木小学校の長所や課題、目指したい学校像などの話し合いを行い、「みんなが笑顔になる学校にしたい」という意見から、「全力笑顔！一人一人が輝く植木っ子!!」というスローガンを作りました。

四月の歓迎集会で全校児童の前でスローガンの提案を行いました。ここでは、委員長が、「植木小学校をもっともっと大好きな学校にしよう」と全校児童に呼びかけ、スローガンに込

めた思いを発表しました。スローガンは、放送委員会が毎朝放送で全校に呼びかけ、みんなが意識できるようにしました。

そして、各委員会が植木小学校で児童がスローガン達成に向けて頑張っている様子を記録し、学期の節目となる学期末に、振り返りとして、児童の姿の良いところと、もう少し頑張った方が良いところを生の言葉で伝えてもらうようにしました。

このような取組を通して、子どもたち自身が学校を創っているという意識を高められるようにしています。



【スローガンの提案をしている様子】

三 鍛ほめカードの取組

委員会活動では、自分が取り組んだよさが、さらに次の活動でも発揮できるように、鍛ほめカードを導入し、一人一人が目標と振り返りを記録できるようにしました。

最初の委員会において、この一年間で目指す自分の姿を設定し、毎月の委員会活動において、取組を三段階で評価し、振り返りを記録するようにしています。その際、児童は、「非認知能力」を意識して目標を設定し、教師は児童の姿を「忍耐力・自制心・コミュニケーション力・共感性・社交性・意欲・自尊感情・樂觀性」などの視点と結び付けて、価値づけや方向づけをするようにしています。これらの取組の結果、児童は非認知能力の大切さを実感することができ始めています。

主体的に学ぶ喜びを育む 学校づくりを目指して

築上町立上城井小学校長 橋 内 幸 江

本校は、築上町の中心部から南に十キロメートル、清流「城井川」上流の山間部に位置し、樹齢千九百年ともいわれる巨樹「本庄の大楠」が隣接する緑豊かで自然に囲まれた学校です。

そのような環境のもと、本校の教育目標「自ら学び、たくましく、心豊かに生き、郷土を愛する子どもの育成」に向けて教育活動を展開しています。

一 地域のひと・もの・ことを生かした取組

全学年、生活科や総合的な学習の時間に地域の特産品である「きくいも」を題材に地域の自



【一輪車の練習をする児童の様子】

然・文化・人々との関わりの中で、地域への理解を深め、子どもたちが自ら課題をもち、探究する力を育む学習をしています。子どもたちは、昨年度の栽培中のトラブルから、もつと効率よく栽培できる方法はないかと考え、地域の農家にアドバイスを求め、対策を練りました。また、「きくいも」の魅力を最大限に引き出すことを目標として、十一月の販売に向けて、

主体的に取り組み、友達と協力して役割分担をし、最後までやりきろうとしています。

その他にも、ホタル学習や米作り体験、バードウォッチングなど、地域の方と楽しく交流しながら、自然を感じ、地域への親しみを深めています。

二 心の成長を育む異学年交流活動

①花いっぱい活動

花いっぱい活動では、高学年児童が低学年児童の手本となり、花の植え方を教えたり、重い物を進んで運んだり、温かい心のふれあいがたくさん見られました。異学年で共に活動することで、高学年児童のリーダーシップを養い、その姿を見て、低学年児童は積極的に活動に参加するなど、単に花を育てるだけではなく心の成長を育んでいます。

②運動会の取組

本校では、運動会で三年生以上の児童による一輪車演技の披露が恒例となっています。高学年児童の頼もしい姿に中学年児童は刺激を受け、中学年児童のがんばりに高学年児童は大きな喜びを感じていました。目標に向かってお互いを励まし合う姿勢は、練習の雰囲気をも明るくするとともに活気を高め、練習を重ねることに、学年を超えた協力と一体感を生み出しました。

本番では、児童の笑顔あふれる発表が披露され、地域の方、保護者から賞讃の拍手をいただき達成感を味わうことができました。

今後も、自然と歴史豊かな地域の特色と小規模校のよさを生かして、主体的に学ぶ子どもの育成をめざし、地域と共にある学校づくりを推進していきます。

各部の活動報告

対策部活動状況の報告

対策部長 清 尾 昌 利

今年度の対策部の活動は、福岡県教育委員会への要望書の取りまとめ及び市町村教育委員会要望内容についての実態把握、東日本大震災被災地（宮城県）視察研修、全連小三地区対策担当者連絡協議会への参加と、三部幹事会における情報交換が主な内容です。

また、昨年度に引き続き被災地視察研修を実施することができました。

一 本年度の要望書の重点項目

小学校・中学校の合同会議において内容を検討し、次の七点を重点項目として要望しました。

- ① 授業持ち時間数削減、専科教員の採用や指導方法工夫改善教員の更なる増員
 - ② 特別支援教育に係る人的・物的環境の整備
 - ③ 欠員が生じない教職員の任用
 - ④ 教職員の処遇改善
 - ⑤ 県立高等学校入学選抜の適正な日程及び方法
 - ⑥ 部活動の適正化及び地域移行の推進
 - ⑦ 勤務状況の改善を図る施策の具体化
- 回答説明会で県教委から、要望した内容について、引き続き対策を検討するとともに国にも働きかけていくとの回答をいただきました。

二 東日本大震災被災地（宮城県）視察研修

県小学校長会視察団としては、平成二十六年

から実施しており、今回で七回目となりました。今回は震災当時に対応した教職員や行政職員だった方、語り部の方から貴重なお話を伺い、災害対応や防災について深く学ぶ研修となりました。

日時 令和六年八月十九・二十日

訪問先および研修内容

【二日目】

○ 石巻市震災遺構大川小学校 視察

○ 元石巻市立門脇小学校 教務 講話

【二日目】

○ 気仙沼市東日本震災遺構伝承館 視察

○ 南三陸町震災復興祈念公園 視察

三 全連小三地区対策担当者連絡協議会

日時 令和六年十月十一日

場所 福岡リーセントホテル

協議題

- ① 中教審特別部会の審議を踏まえて、学校における働き方改革や処遇改善について
 - ② 教員不足の状況と、教員の確保・質の向上の取組について
- 三地区（中国・四国・九州地区）各県の対策担当者と協議題について情報を共有し、要望活動につなげることができました。

四 これまでの主な活動と今後の予定

- ① 小中連絡会（重点項目内容選定）
五月二十日、六月十三日
- ② 県教委への要望書提出
七月十六日
- ③ 全連小三地区対策担当者連絡協議会
十月十一日
- ④ 県教委小中学校校長会要望書に係る回答

説明会

十一月十二日

- ⑤ 市町村教育委員会要望内容についての実態把握・集約
十二月末まで

- ⑥ 対策部長研修会
一月二十二日

調査研究部活動状況の報告

調査研究部長 原 尾 宏 志

調査研究部は、県小学校長会の活動方針に基づき、令和七年度全連小研究協議会福岡大会を見据え、研究主題「志をもち多様な他者と協働しながら次代を創る人財を育む学校経営の推進」を新たに設定し調査研究を行っています。

一 調査研究部アンケート

三つについてアンケートを実施しました。

調査① 人材育成に係る現状と課題

調査② ICT活用に係る現状と課題

調査③ 働き方改革の推進

特に本年度は、「福岡県教員育成指標」に基づいたキャリアステージに応じた人材育成の状況、発達段階に応じたICT活用を重点に、県内抽出の九十校から回答をいただきました。その結果について簡単に報告します。

・基礎・向上期（一～六年目）では、教科等の目標を踏まえた実践的指導力育成、充実・深化期（七～十一年目）では、学校経営の具現化に向けた校務運営の中核的役割を果たすリーダーシップ育成、指導教諭・主幹教諭、教頭・副校長へは、学校経営に参画する機会の設定に取り組まれている。

・上学年ほど児童用PCが活用されており、高

広報部活動状況の報告

広報部長 田 浦 由 佳

学年で六十八％が毎日活用されている。
・情報活用能力一覧は七十四％の学校で作成されており、そのうち六十四％は学校主体で作成されている。

・働き方改革は七十四％の学校で進んでいる。
詳細は、調査研究部地区幹事を通じて各校に送付しているアンケート結果をご覧ください。

二 三地区調研担当者連絡協議会

・日時 令和六年十月十一日(金)

・会場 福岡リーセントホテル

・参加者 中国、四国、九州地区十七県の調査研究部長

・内容 ①教員の資質向上に向けた取組

②学習指導要領全面实施五年目に係る取組状況と課題

教員の資質向上に向けた取組については、「ベテランが若手に教える」から「教員同士で学び合う」という考え方への転換が必要であると考えました。そのために、教員同士が情報を交換しやすい環境づくりや働き方改革の推進による教員が学ぶ時間の確保に取り組まなければならないと考えました。また、教員の研修意欲を高めるためにも、研究内容や方法の選択と集中も必要だと考えました。

一人一台の児童用PCの効果的な活用については、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の達成に向けたツールとしての活用の必要性を再認識しました。また、系統的な指導のために情報活用能力一覧の必要性も認識しました。

これらは、学校単位で取り組むことも大切ですが、学校間差を解消するためにも市町の校長会で取り組むとともに、必要に応じて自治体に働きかけていくことも重要だと考えました。

活動の実際と活動予定

一 県小学校長会及び各郡市校長会における

広報活動の活性化に資する広報部長研修会

第一回 五月九日 第二回 九月十八日

第三回 一月二十二日

福岡県社会教育総合センターにおいて

二 学校経営充実に資する県小学校長会報誌

「校長会報」の発行

【二〇三号】七月発行

内容「会長挨拶」(廣渡一郎会長)

「退任副会長挨拶」(六地区)

「新任校長抱負」(六地区)

【二〇四号】十二月発行

内容「県教育施策の見通し」

(義務教育課長)

「特色ある学校経営」(六地区)
「各部の活動報告」(各部長)

三 県小学校長会ホームページの充実・運用更新内容

「令和六年度研修計画、年間行事、

研修会一覧、欠席届」

「二年次校長研修会を終えて」

「校長会報一〇三号・一〇四号」

「事務所だより 各号」

「第八十回福岡県小学校長会研究大会」

(要項、資料、講演動画)

「研究紀要執筆依頼・原稿フォーマット」

「第二回郡市校長研修会講話資料」

四 全連小機関誌「小学校時報」への寄稿

【六月号】「学校めぐり」

(組織力の向上を推進する学校経営)

柳川市立矢ヶ部小学校長 横溝 秀樹 先生

【七月号】「会員の声」

(全連小学校長会総会・研修会に参加して)

嘉麻市立下山田小学校長 安藤 裕子 先生

【十月号】「各都道府県校長会の動き」

福岡県小学校長会幹事長 松本 剛 先生

【十二月号】「会員の声」

(全連小徳島大会第七分科会に参加して)

筑紫野市立吉木小学校長 日高 道子 先生

【二月号】「教育論壇」

(全連小福岡大会の研究課題によせて)

福岡教育大学教職大学院 特任教授

川島 耕司 先生

五 福岡県小学校長会「研究紀要」の作成

二月中旬発行予定